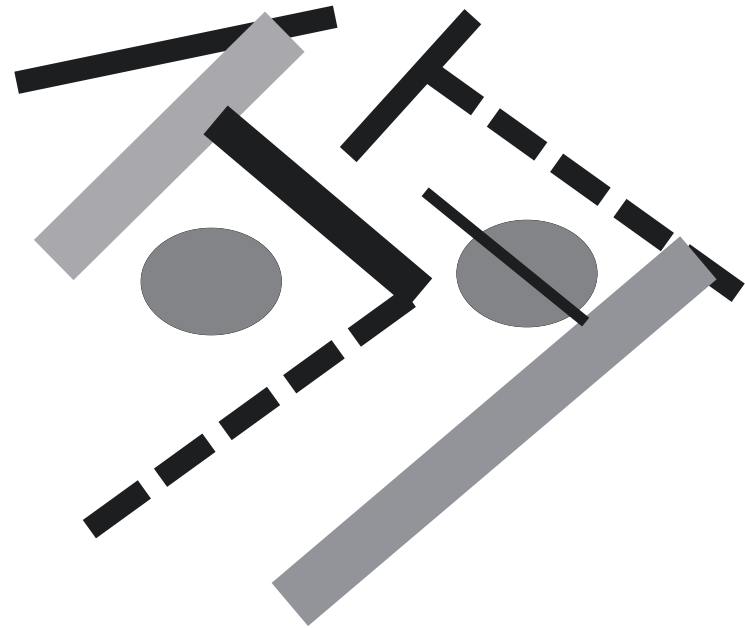

月 刊

Mélange

VOL. 79



2013.03.31

詩／エッセイ

月刊「Mélange」VOL.79

2013/03/31

月刊「Mélange」編集部

「月刊めらんじゅ」79号目次

詩

番号／模様	ゴチャクカオリ	4
旅	川田あひる	5
君も人形を見るだろう	月村香	6
ヤッホー 將軍	中嶋康雄	7
ミケランジェロのトマソ	福田知子	8
連想ゲーム2	野口裕	9
父の引越し	にしもとめぐみ	10
崩れ	高木富子	10
隙間	岩脇リーベル豊美	11
巡礼心得	千田草介	12
風のおとない	大橋愛由等	13
失踪者(届かない手紙)	高谷和幸	14
陋屋	寺岡良信	15
棒のように立つ人は川の向こうにいる	中堂けいこ	16
海市	富哲世	17
イツセイ		
「詩人通りより」3 「レントゲン博士の実験室」	岩脇リーベル豊美	3
「夜の調べに寄せて」45 「ポロデインを聴きながら」	寺岡良信	18
「神戸詞あしび」68 「うたが継承されること」	大橋愛由等	20

当地は学校等の新年度が九月開始なので、冬学期が終了してから慌しいといふこともなく三月は雪で始まった。卒業式もなく、学位授与や終了祝賀が行われるところもある。出席してもしなくてもいいし、数々の式辞を述べることとも国歌を歌うこともない。学校制度が違うから、そもそも入試というものがない。

そんな春らしくない三月に、二十年來非常勤講師を勤めている専門大学 Fachhochschule (総合大学 Universität のほうではなく) 二週間一日六時間の日本語集中講義を行った。毎年この時期いくつかのコースが開講される。その講義室は学期休み中の都合もあってか、通常使用している校舎ではなく W・C・レントゲンが1955年所謂X線を発見した実験室を記念館として残している校舎にあった。この町は第二次世界大戦の空爆で90%以上が破壊されているのだが、その建物は空爆を免れたもののひとつで、かつてはヴェルツブルグ大学物理学校舎として使われていた。1977年に専門大学に手渡されたが、私はその譲渡の理由は知らない。

詩人通りより／3 レントゲン博士の実験室

岩脇リーベル豊美

なぜこんな前書きを長々としているかというと、1995年X線発見百周年には関連して幾つか催しがあったと記憶しているものの、非常な研究者であり初回ノーベル物理学賞受賞者でもあるレントゲンという人とその功績がこの町では野晒し状態であると思えるからである。褒め称えよと言っているのではない。授業の合間を縫って展示物の写真を撮ったり、資料を見たり、以前姉妹大学関係者の訪問時に通訳したことなどを思い返したりしているうちに、IPS細胞の山中伸弥教授ノーベル賞受賞の報道とも重なって、挫折経験エピソードや「私個人の受賞ではなく日本全体で受賞した」、「日本の子供たちや若者たちがいかに科学を好きになってもらうか」といった国籍強調の発言が気にかかっている。だからかもしれない。本心であるだろうし、マスコミによる強調もあつたと思う。だが、欧米の科学者は国籍への関心が低く、レントゲン自身はドイツの物理学者として知られるが、戸籍上は母国籍のオランダ人であり、国籍が議論対象になること自体あまりない。そして何より、誰もが自由に出入りできる専門大学の一角にオリジナルの器具や遺品、ノーベル賞等の証書が、無造作に、とは言い過ぎだろうが、展示されていることは驚きであり、野晒しと表現して

しまうのである。

1888年レントゲンは仏シュトラスブルに移ったコルラウシュの後任としてヴェルツブルグ大学に招聘されることになるが、その二十年以上前、当のヴェルツブルグ大学に招聘されることはあまり知られていない。教師にいたずら書きをした友人を庇いギムナジウムに行けずにアビトゥア(大学入学資格)を持つていなかったためである。レントゲンはオランダの工業学校で学んだ後、スイスのチューリッヒ工科大学に行き、機械技師のディプロム、そして物理学の博士号を取り、イェナ大学やウトレヒト大学からの招聘を断つてまで、物理学科主任教授として、一度は入学拒否された大学に就任するのである。アインシュタインもやはりアビトゥアがないという理由でスイスで勉強しており、そういう科学者は少なくない。

1894年の夏から進めていた陰極線の研究ではあつたが、1895年11月8日深夜レントゲンは、四方を黒紙で覆ったクルックス管を使って実験したとき偶然机上にあつたシアン化バリウム白金の結晶が蛍光を発していることに気づき、のちにそれが放射線であることをつきとめる。その八週間、レントゲンの集中力は、この校舎の一階の実験室と二階にあつた住居間の掃途時間も惜しく寝台を実験室に運び込んで打ち込んだという逸話も残っているほどである。最初のレントゲン撮影はレントゲン夫人アンナの薬指に指輪をはめた右手(ドイツ人は結婚指輪を右手にする)と木箱に入った金属ケース入り方位磁石だった。レントゲンは熱烈な狩猟家でもあつたというが、その他、彼の望遠鏡や剥製も展示されている。

生涯に58本にもおよぶ学術論文を発表し、国内外から贈られた学術賞も80を超える学者であるのに、謙虚でX線発見後初めての講演では「私はたまたま放射線が黒紙を通り抜けるのに気づき、木やノートも使って試してみた。私には勘違いとしか思われなかつた」と語っている。また、科学発展は万人に寄与すべきと考えていたレントゲンは、「X線の特許等で個人的経済的利益を得ることはせず、物理学協会がこの放射線を「レントゲン線」と名付けることを提案され承認されても、彼自身は常にX線と呼んでいたという。ノーベル賞の賞金500000クローネも遺言によりすべてヴェルツブルグ大学に寄贈されている。そのオリジナル証書カセットがこの実験室外の狭い廊下にあるガラス棚に展示されているのを見て私は少なからず驚いた。レントゲンは1900年以降、ベルリンの招聘も摂政ルイポルトからの貴族の称号も受けず、バイエルンにはミュンヘン大学にて教鞭をとる。プロイセン嫌いだつたのかとも思う。ただ野晒し美談に聞こえるが、この校舎で授業を終えて野晒しの詩を書くことと思つた。

◆番号

ゴチャクカオリ

置き忘れてしまったのを気付いたのは
ホームだった
溢れる人々は
ひとりひとりに番号を渡される
待ちくたびれて眠っていたり
ガードゲームをしていたり
パンをナイロン袋からジャリジャリと出して
食べ始めたりしている
点滅が現れると顔を上げ
案内の声には耳を澄ます
現れるまで待つ
自分の番号
どこに置き忘れたのかさえ
紛れてしまっただけだ
ただ舗道には
白い羽根たちが
落ちていた

◆模様

ゴチャクカオリ

池は太陽を呑みこんだから
水面に波が浮かびあがった
模様の幾筋かを
数え出すと
風が邪魔をする
「もう数えなくていいのだ」
うつすらと暗くなったり
また現れたりする光の水面の内側には
寒そうに
黒っぽい小さな鯉がゆつくりと泳いでいる
門はまだ見えない
深緑の水中

◆旅

川田あひる

父と
母と姉妹と
車に乗って 旅した
旅の目的は
むかし住んでいた家に行くこと
たて壊されもせず
そっくり のこっついて
入ると
いとこが来ていた形跡があり
のちに産まれたわたしの娘もソファーにすわって
美しく 成長している
じかんが迫っている
火の元 鍵を
点検してまわる
まわる広さなどなかったのに
角の家はおおきく見えるんだ

瞬間湯沸かしのレバーがうらがえって
危ない

父が急いでなおし
もうじかんがないぞ いって
カーテンを閉めた
急がないとじかんがないぞ
皆乗ったか
五十代の父は
髪が黒々している
わたしたち姉妹も五十
ああ、急いで
水をもたなかったね
けど土産は買えた
父とは
天国へつづく坂で
別れた
外灯は
ともっている

◆ミケランジェロのトマン

福田知子

やさしい場所に眠りたい
こう囁くあなたの永遠のトボスは
フィレンツェの見はるかず丘の上
そこにはいつも太陽が輝き
真昼の月光さえ降りそそぐ
ミケランジェロ広場に立つと
薔薇色の屋根が眼下に広がり
観光客の眼を惹く
薔薇色の煉瓦は複雑な色合いの混淆を映し出す
真新しい煉瓦を敷き詰めた人びとの幸福も
フィレンツェの誰もかれもが何百年も繰り返して共有してきたことを

季節外れの冷たい風に誘われて 深呼吸
花粉症の鼻孔にも涙がちな目がしらにも
眼下からのおいたつ薔薇色の気に充ちて
なんだかいつそうの勇気が湧いてくる
この丘の広場の標高差を越えられるような
国境をも難なく跳び超えられるような
ルネサンス時代の八万人人Vになれるような
これはちよつと心浮き立つ薔薇色の奇跡

ミケランジェロ・ブオナローティという長い名前を持つ
つあなたは
彫刻家であり 画家であり 建築家であり そして
詩人
あなたが詩人であることは友人のFranco Piccolinoも知らなかったが
「トマン・ガバルエーリに献ずるソネット」
この詩に描かれたヘイメロス(愛の情念)は
「いまだ肉の衣に被われた魂」であり愛の証なのだ
ミケランジェロのトマンへの薔薇色の記憶
—— 魂 薔薇色の肉への 戸惑いの記憶 ——

敏捷に逃げ去る甘美な記憶 死をも甘美なものに変える美の記憶

この丘で ミケランジェロは若いトマンを想い 竹み涙ぐんだことはあつたか
この丘を降り 年若い青年を恋する苦悩を ベンに撃に 託したのか
すべてが風化した観光地の丘にあつて なおルネサンスの墓碑銘のようなあれら屋根屋根を渡つて薔薇色の頬のトマンが ゆつくりとこの丘に近づいてくるようだ
丘に佇む異邦人は何と挨拶すればいいのかしら

註1「トマン・ガバルエーリに献ずるソネット」ミケランジェロ・ブオナローティ著・小林稔訳

受肉から解かれた、この世ならぬ光景も

地上に墜ちたもろもろの存在も、私には思い描くことさえ叶わぬ。

(可能な限り高みへと昇りつめる私の思考に導かれて)そなたの美に私自らを武装しえたとして。

そなたから離れていると、愛の神が

私からすべての美德を奪い、貶めるのではないかと恐れるのだ。

私の苦しみを弛められんことを願う。

私自身が増殖させた苦しみではあるが、私の生をも踏みじめる苦しみを。

だが、私とその苦悩から逃れようとしても叶わぬこと。この敵なる美が立ち去るのを引き起こしているのは私なれど

私よりも敏捷に逃げ去る美から私が背を向けようとは思ひもよらぬこと。

愛の神は、これほどの苦悩が、やがては甘美なるもの

になろうと

私に誓つて、その両手で私の涙をぬぐうのだ。
これほどの犠牲を私に強いたものが、卑しくも愚かであるはずがないゆえに。

二

そなたの美しい御顔に、お私の高貴なる人よ、その無為の人生では、言葉では伝えがたいものばかりを読み取ってしまうのだ。
いまだ肉の衣に被われた魂は、そなたの恵みで、いくたびも神を仰ぎて羽搏くのだ。

意地悪で愚かな卑俗さゆえ、私に後ろ指をさすという過ちを

人がしているのだのだということを彼らが知らないでいるとしても

私の燃え盛る熱情は静まることはない。

私の愛情も、私の信念も、私の純潔なままの欲望もまたそうではない。

私たちがこの地上で見えるすべての美は

私たちが存在の恩恵を受けている慈悲深い源泉に融合している。

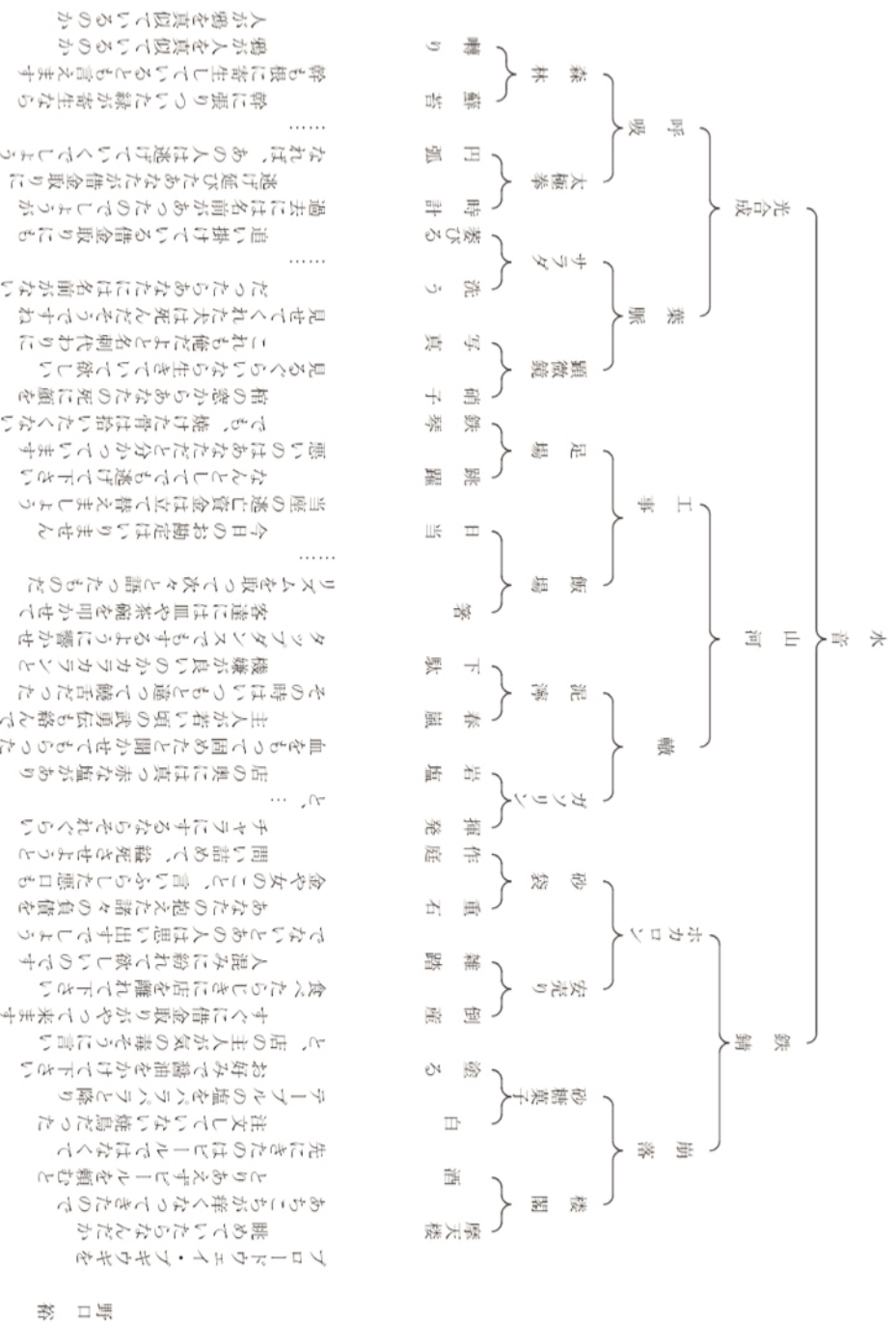
鋭敏に滑り込む精神よりも多くそのことを識るものは他にはない。

この地上には天空とは別の、いかなる影像も、いかなる収穫の果実ももちろん

私たちは所有していない。そなたを激しく愛する者こそが

神の御座に昇りつめ、死をも甘美なものに変えるのだ。

註2「心配も恐れも死さえ感じられないほど多くの甘美さで、心も体も満たし養っているあなたの名前を、むしろ私を生かす、惨めにも私の体だけを養っている種以上に忘れることがあるのか。それほど私は記憶にあなたの名前を持ち続けているのです。(一五三三年七月二八日付の手紙より抜粋。小林稔訳)」



連想ゲーム2

◆父の引越し

にしもとめぐみ

高齢者住宅から病院
新しいホームへ

父とともに使い古した鞆や
長年おかれてあった家具
着慣れた服や手持ちの物が運び込まれた

九十近い父の引越しを
九十近い母が準備する

人生は長い長いと母が呟く

六十年以上彼のそばにあっただろう
洗礼時の聖書がおかれてあった

いくつになっても両親のこどもである
私がい

◆崩れ

高木富子

安倍川は南アルプス赤石山脈の最南端大谷
崩れを源流とする
ためらいなき崩れの源流域
崩壊土砂 その砂礫の暴れを制御すること
は不可能だった

幼い記憶の背骨にある安倍川は
普段水量乏しく細い流れがあるばかりだが
雨の後 濁流が通り過ぎ 川原は石ころと
砂利で埋め尽くされる

砂利取り業者が掘った跡はアリジゴクの穴
に似たり鉢状であった

時折川原遊びの子が落ちて死んだから 川

原に行くなと強く禁じられた

が、砂利採取が盛んなわけなど思い及ばな

かった

わたしは幼かった大谷崩れを知らなかつ

た

低地に住むな 川の近くに住むな そう言
われ続けた

が、出生の その安西五丁目辺りには
戦国時代の末期 既に霞堤が築造されていた
文政、大正、昭和の氾濫の話を幾度となく
聞いた
無心の感応
自分自身が体験したほどのリアルに
前世を信じた その時をわたしは生きてい
たと

逡巡の泥水色の故郷

それはまた炎熱の焼尽の明紅色の故郷でも
あった

昭和一五年 新富町から出火

約五千戸焼失 我が家も焼失

昭和一九年 初めての静岡空襲に再び焼け

出される

祖父母、父母、姉、兄それぞれの静岡だった

未生の時を 体の奥に感じ取り

焼け崩れる家々や焼けぼっくいになった人

を思い起こす

今思う 崩れとは怖いもの

生きて崩れのさまざまは背骨に貼りついて

わたしを押し流す

抗いがたい

今日も新たな崩れのさまざまを身に纏う

抗いがたい

◆隙間

岩脇リーベル豊美

晩冬の或る日曜の昼下がりに

ロマの子がふたり

住宅街の屋根のうえで遊んでいる
ガレージ横の手摺から攀じ登って

軽やかに家々の天辺を渡りはじめる

男の子と女の子は兄妹なのか

睦まじく終始くすくす笑いながら

壁と壁との連続に間隔は見つからないのだろう
造作もなく飛び越えてゆく

兄は妹よりも頭ひとつ大きく

樹木の名前を教えているようにも読める
手折って髪に挿そうとする

女の子の長い巻き毛は

残雪に落ちる薄日に琥珀色に耀き
放浪の風景が広がる瞬間

ロマの子たちにどこかの中央駅で

まだ財布を抜き取られたことのない

無料広告配達人が手車を牽きながら

見向きもせず歩を進める

ドゥムドゥムドゥムドゥムドゥム・・・

夢から醒める

サクサクサクシユシユ・・・

銃撃音が木枝の隙間を泳いでゆく

今日はもはや誰も登らないであろう枝の間を

◆ 托鉢遊行巡礼心得

千田草介

自分は不在なのだと思惟することは泰西の賢者が省察したるところとまったく矛盾するのですが本邦は東方辺土ゆえにこの地にて修行する身となれば不生ですべてととのうと達観したる禅師の教えを杖として諸仏諸尊を拝しつつ霊場を行脚するがよろしかろう。生まれていないと観ずればわが身の在るわけがないのです。そうして存在の裏側をめぐって行くのが遊行の要諦であります。しかしながら、いやおうなく襲ってくるのが空腹。食物への渴望は色身を存在たらしめるためのものですから不生とは相容れません。したがって身を樹木のごとくする以外になく、そうすると木乃伊となって即身成仏できるわけですが、仏となってしまうのは永遠の禅定でもう修行行脚も不必要となつて、仏となる前の菩薩行について述べるこの心得の示すところからは逸脱してしまいますから、托鉢により適度に食を得て身を養いましょう。施しを求める心をいなくことは修行のさまたげとなりますから、勝手に空鉢の中に食がやってきてそれがわが身の五臓六腑に入るのであり、それは地水火風空すなわち五大の、宇宙の運行のひとつの現われなのであると観ずれば、摂食は不生となんら矛盾するものではないということがおのずと察せられてくるのであります。しかしこの末法の濁世にあつてはじゅうぶんな布施が得られるとはかぎりません。かの釈尊にしたところが腐つたもので食あたりをおこして涅槃にいたつたということですから、凡夫の身なれば食がままならぬことはいかにもあり得べきことです。さればデッド・エンドと観じて次なる輪廻での修行のつづきをいたすことにしましょう。そのために死に装束を身につけていくわけです。

◆ 風のおとない

大橋愛由等

福木に棲む赤衣のマコトに声をかけると「荒び街に幡ばんを立てに行きたいのだが南風神ノトスの機嫌がいまひとつなので出発の神託はおりないと預言者が伝えてきた」と繰り返すを云うので「よもぎの生えている沃野にはかならずクレオール語をしゃべる牧人がいるので四足蛇が三月つごもりに何を語ったかを知つていよう」となにげなく伝えたら「それはきつと夕刻にしか現れない三つの禁忌がたつぷり塗り込められた春キャベツのふくよかさを満喫したあとで発する形容詞のことではないか」などぼんやりしたままなので「間違いに気づかないのは嘆願者たちが頭に白いリボンふしじを巻き付けてやってきたその時にあなたの臥床ふしじに飾られていた花がサミドリ色だったかどうかだ」のようにあえて真を問うたのは良いが「クレオール語を翻訳していたら〈石でさえその言葉に怒るであろう〉との箇所がぼくにむけられていることを知ったのだ」と告解めいてきたので「まずは赤衣を脱いでからあなたが姦通したのは老木ばかりなのはなぜなのかを知るべきであろう」など言い続けると「羊たちがいつせいに四散してしまつたあとの牧人が歌い出すのは南風神ノトスへの呪詛なのか讃歌なのか分からない」評定をくだすマコトにむけて囁く言葉は「いつも匣には明日をいれないこと未生は未生のままであること臥床には異語の箴言は禁物であること嘆願者には第七門で待てと伝えること」なのだと思なし福木に向けて淀みなく語るために歩き出したのであつた

◆失踪者（届かない手紙）

高谷和幸

彼女のゆめの中（自己理解）には、この男の場所（捨てられないぼろ布のように）が傷跡のように残っている。彼女のトレースを取り除くには思いもよらぬ追尾する者の協力がいる。真つ新な紙面に適応しすぎるぐらい適応してしまう失踪者と追跡者の。身証を机の引き出しに（食べかけの果物が死体に見える）、存在を鉛筆の芯のように削り続ける（超人には、役立たずの役者を始末する権利があると思ひ込んだカルヴェロが舞台のすそにいる）。扉をあけたままで、とんがるたたまいを沿って暗闇に逃げ出そうか。たくさんの名前と自分の名前の結び目を間違うエスタブリング・ショットから。反転したぼろ布のような二人の犯罪現場（シーツのシミのような男だった）には老練な豚の失語症みたいな赤らむものがぶるぶると震えている。細胞の被膜におおわれているから、表面には見えないものが、見えないままで残ってしまったうのはいかにも惜しい気がする。封筒の中にかくれた言葉みたいだね。そうだからと言って、手掛かりにリンパ腺とか血液ぐらいは深夜の工事現場に謎のように残しておこう、と思うのは表面の危機だ。つねに、手紙はすでに読まれている。「見させておくれ」。君のうでの中で、六月の舞台に小さなバレリーナが踊っている。

◆陋屋

寺岡良信

流水を拒んで鍵を挿しかけたまま
ひと冬を留守にしたその人は
帰らなかつた

春の嵐に咆哮する海も
針葉樹をなぎ倒す風も
鋭利な刃を銀河の尾の切れ目から
撃ちこんでくる
星の欠片も
朽ちかけた小屋を壊さなかつたのは
行き先さへ告げなかつた人が
つかの間の夏を待つ
その為であつたのか

抉られた湾の蒼い地層から
真水の滲み出す日
白夜は人の生きた証に
寄り添つて燃える

主を失つた暁を
軋み通した
梁よ
柱よ
その人が流水を拒んだのは
追憶に燻されたそれらすべての形が
灰かな炎に
蝕まれるやうに頬ほれて
清冽な灰を
トゥオネラの水路に流す
この夏を待つ為だけであつたのか

◆棒のように立つ人は川の向こうにいる

中堂けいこ

それほど皆がすんなりしているなかで、案山子のようにおもえる一人がわたしに話しかける。案山子が口をきいたので驚いてしまう。この人々は川向うの人々と違ってみんな生きているのだ、というようなことを云う。川はそのような隔てをすることはない、生き死にはすべてこの世のできごとのなかにある、死もまた生者のなかにはいるはずだ、と云うと案山子は案の定しずかに黙り込む。沈黙はからからに乾いてひからびてしまった。この人は久しく別れたままの人で、今になって会えたとしてもその久しきの加減にとまどうばかりだ。

(眼前の山の頂きから火の手が上がり法螺貝が山のあちこちから響いて、火はまたたく間に全山を覆った。それらを眺めるわたしたちの両眼が熱くなりわたしは足元から燃え上がるようだった。傍らに立ちつくす案山子は黒っぽくなって訳のわからない笑みをうかべていた。)

山焼きの跡を追うように、わたしの参加する山岳会は焼かれた山の東側に広がる原生林を踏破してきた。おりからの寒冷前線が広い盆地を西から通り過ぎるところで、

◆海市

富 哲世

どんな速いロケットだって

死に追いつくことはできない

そんなことを考えながら

春霞のなかの

おぼろな島影を見おろしている

椿の丘を過ぎて

石像のある

庭がひらけている

ここはまるで

滾々と水の湧く

失われた魂の岸辺

破れたように昼の狼煙がくゆっている

山の上のドライブインの

海峡を一望できる島のあの高台では

巨人の風ぐるまのような

急激な気温の低下と雨のため、装備の不十分なわたしはかなり体力を消耗していた。会のメンバーもわたしの失態に気付いていたが、誰もなにもそのことに触れなかった。標高差三百メートル登り数キロをたかだかハイキングコースだと侮ったわたしは、背骨の芯が凍えるのをこらえていた。弱音を吐くと一気に震え出しそうで、後はこの焼き跡の生々しい山坂を下るだけだとおもえば少し気が楽になった。火付け場を過ぎるとススキの燃え残りがあちこちにあつて焦げた匂いを放っている。わたしは登山用の手袋で硬い茎の束にふれていく。山肌をいちめんの焦げあとが覆う。火がここを走ったとき、山のふもとでわたしの傍らにいた人も燃えてしまったようだ。もう少しである笑みの訳がわかるのだが、棒立ちのススキはいたるところにあつて、この世の端っこをみせつけている。

人々の中心の女がわたしにその人と居るのだと云う。その人は灰色っぽいつめえりの服を纏い突っ立ったままだ。人々がわたしたちをとりかこみ手を打ち(祝福ではない)流れるように、岸辺のこちらで音を聞き続けるように、と手を打つ。そのとき燻るような気配がして、その人はすでに川の向こうにいるのだった。

人けのない観覧車が午睡の風に軋み

青い海流を渡る

妹問いの鹿が

今も港に踏み迷う

低く軒を連ねた商店街の

露地の向こうに石段と

くすんだ鳥居が見え

セキレイが時ならず誇らかに囀る

さびれた表通りの石畳では

老婦が椅子を引き出して

黙々と小魚をさばいている

水平線のまろみを窺う

わたしの貧しい筒先から

ここに触れるその風景が

いま見えるか!

ありありと

死の近さほどに

ポロディンの弦楽四重奏曲第二番の第三楽章は『ノクターン』と名付けられて、独立して演奏されることの多い名旋律である。入院中私はこの曲を繰り返し聴き、肝臓に転移した癌と闘っている現在も、ラフマニノフの『ヴォカリーズ』、ヴィラ・ロボスの『前奏曲』第一番とともに、手元から離れたことがない。

私がついているCDはポロディン四重奏団の演奏で、遙かな郷愁を訪ねあぐねて物憂くたゆたうチェロも、同じ主題を反復する第一ヴァイオリンの、澄んだ月光に洗われたような高音の喘ぎも、演奏者自身の愛惜をともなう切々と心に沁み入ってくる。昔、長男が誕生した頃、一緒に聴いていた妻が王翰の『涼州詞』を連想すると言ったことがある。そのためなのであろうか。寝付けぬままに深夜の病室で『ノクターン』に抱かれてみると、蒼い月光に凍った砂漠がありありと浮かんでくる。兵士の宴が琵琶の音とともに果てると、流砂のさざめきが死者たちの慟哭を深い沈黙に呑みこみ、闇はようやく私自身を眠りに誘ってゆく。

『涼州詞』はわが国でも広く愛唱された盛唐の七言絶句で、高校の教科書にもよく採られているから、ご存知の方も少なくないはずだ。

葡萄酒の美酒、夜光の杯

飲まんと欲すれば、琵琶、馬上に催す

酔うて沙場に臥すとも、君笑うこと莫れ

古来、征戦、幾人か回る

松浦友久氏の『漢詩』（岩波新書）によると、周囲を絶えず精悍な騎馬民族に侵されてきた中華帝国では、いく

九世紀の後半はナシヨナリズムの台頭期であり、それは作曲にも波及して各民族固有の旋律やリズムを重視し、伝説や歴史、自然風土や民衆生活に素材を求めた作品が陸続と生み出された。スメタナは有名な『モルダウ』を含む交響詩『わが祖国』でボヘミアの自然と歴史を高らかに歌い上げ、フィンランドのシベリウスは交響詩『フィンランディア』でロシアによる圧政への抵抗を示した。

「五人組」のなかにあってポロディンは、異国趣味がひととき目立っている。

彼の作品中最もよく演奏される曲が、歌劇『イーゴリ公』で演じられる『ダツタンの娘たちの踊りと合唱』であり、ロシアの軍隊とアジア人の隊商が草原で出会い別れてゆく情景を描いた『中央アジアの草原にて』であることがそのことを物語る。そうしたエキゾティシズムの最も洗練された精華が『ノクターン』なのであろう。

国民楽派は、西欧音楽史に多様な一頁を加えただけではない。また国民意識を鼓舞して先進諸国の文化文明に対峙しただけではない。それは作曲に「民族」と「民俗」を取り入れることよって、あらたな音楽語法を開拓し、表現の可能性を広げた。それはドビュッシーの印象主義に全音階や五音音階の「旋法」の導入を通して影響を与え、調性からの逸脱や調性そのものの溶解はやがてシェーンベルクの「十二音技法」を生み出してゆく。さらに「土俗」の持つ原始的なエネルギーを炸裂させながら、ストラヴィンスキーが華々しく登場してくるのだ。

NO.046 寺岡良信

夜の調べに寄せて

ポロディンを聴きながら

さを歌うことは詩の主要な伝統であり、異郷に接する最前線の屯所と駆り出された兵士に視座を定めた「辺塞詩」のジャンルが形成されていったという。

氏はこうも説いている。辺塞という未知で広大な時空が呼び覚ます、生命の危険を代償とした抒情性。「七言絶句」の型式に内在する抒情性。この二つのものが融合したときに優れた「辺塞詩」が生まれ、戦争という苛酷な現実を美しい刺繍糸で縫いとるかのようなエキゾティックな浪漫の情趣が、読む人の琴線をかき鳴らしたのだ、と。

エキゾティシズムも浪漫的情趣も、下手な作者が用いれば安っぽい感傷に陥る。私がチャイコフスキーの音楽に今ひとつ浸りきれない理由も、その過剰に甘美な節回しと、豊麗な音色を駆使しオーケストラをたつぷりと歌わせるストコフスキーやオーマンディの、悪く言えば大時代的な名人芸をさんざん聴かされてきたせいかもしれない。ポロディンの『ノクターン』も、ラフマニノフの『ヴォカリーズ』も、ヴィラ・ロボスの『前奏曲』も、さらにはバーバーの『弦楽のためのアダージョ』も、甘美さと哀切さにおいては決して引けは取らないが、それが室内楽や独奏曲や弦楽合奏という簡素な演奏形態であることと、私が好んで聴いてきた演奏が、ポロディン四重奏団やマイスキーやイエベスといった、流麗ななかにも知的な抑制を忘れない芸術家たちによるものであったから、病を得た今日にあつてなおいっそう、掌中の珠のように慈しみ愛しつづけているのである。

ポロディンはバラキレフ、キューイ、ムソルグスキー、リムスキー・コルサコフとともにロシア国民楽派、いわゆる「五人組」と呼ばれるグループを形成した。バラキレフを除いて皆最初はディレクターの集まりであり、ポロディンの本業はペテルブルグ薬科アカデミーの化学教授である。彼らが活躍した「五人組」の流れを汲む作曲家にチエレピンという人物がいる。彼はロシア革命の勃発により一家とともにパリに移り住むが、フランスの音楽家たちと親交を結ぶ一方、西欧音楽においては未開地であつた中国や日本に目を向け、一九三〇代に何度か日本を訪れ、「チエレピン賞」まで設けて、日本の若き作曲家の発掘に努めた。「チエレピン賞」は一九三五年に、ルーセルやイベール、オネゲルといった大家を審査員としてパリで選考がおこなわれ、無名の青年・伊福部昭の『日本狂詩曲』が一位に選ばれる。「イフクベとは何者だ」と、揺籃期にあつた日本の楽壇では誰もが訝しみ、ちよつとした騒動になつたという。

伊福部昭は戦後、映画『ゴジラ』の音楽で有名になつたが、その頃は北大農学部で林業を専攻する学生であり、音楽は全くの独学であつた。帯広近郊の開拓地に育つた伊福部は幼い頃から、日本の各地から流れてきた貧しい移住者たちが酒を呑みつつ歌う民謡やアイヌの音楽に親しんでいた。

『日本狂詩曲』は、ヴィオラが奏でる暗く怪しい「酒盛り歌」で始まる。この曲を初めてラジオで聴いたとき、荒涼と広がる最果ての大地と吠えるような海鳴りが、荒々しい靈氣を孕んで私の心を鷲掴みにし、「棄民」という言葉が思わず口をついて出たのを、憶い出す。そこには同時に、音楽への情熱に身を灼かれながら、昼なお暗い林間にこもつて黙々と演習に励む伊福部の孤独な心象風景も重ねられていたのであろうか。

大手術からの生還を半ば奇跡的に果たしたものの、私の日常は死を濃厚に意識せざるを得ないものに変つた。そして死は、『ノクターン』の甘美な陶酔と『日本狂詩曲』の棄民の心の空洞のあいだを、ときに烈しくときに緩慢な振幅をもつて、揺れ続けているようである。

さらに伊福部昭のこと

神戸詞あしび



徳之島出身の、時山実さん（右）

うたが継承 されること

のみなさんが、課題曲の「一切節（ちゆつきやいふし／ちゆつきやりふし）」以外にもう一曲徳之島のシマウタを歌うことが義務づけられている。この「もう一曲」の中にこの島ならではのシマウタがふくまれるので注目しているのである。今回の注目した歌は、徳之島町亀津出身の時山実さんがうたった「うつつしよばる（後原風）ちようきく節」であった。

た。この曲は、時山さんが、昭和五十七年一月十一日に亀津生まれの永井円伊さん（当時80歳）と、治岡利春さん（同・83歳）といった明治生まれの二人から聞き書きしたもので貴重といえよう。

この曲は一七節まである長いもので、徳之島のシマウタらしく物語性ゆたかな内容となっている。歌詞の中心は、「まんぐわ」と「いんだぐわ」という二人の女性の器量比べが中心なのだが、この歌詞の筋と外れた話題がいくつか挿入されているのも興味深い。

まず歌い始めは、「私達知らんで／習て来で ハレエー 後原原ちようきく節 私達知らんで／習て来で ハレエー 福美主 マンぐわた処ぢ習て来で」である。（私たちは後原原

第六回徳之島一切節大会が、三月三日（日）に、神戸市長田区新長田勤労市民センターで開かれた。

この大会では、唄者

ちようきく節の歌を知りません。福美主のマンぐわのところに行つて習てきましよう」との意味となり、歌への誘い込みが表現され、当日の会場では亀津の人たちが唱和していた。

三節目と四節目は、挿歌というべき内容であろうか。古仲徳南侯が持つている畑は土質が良いのだが、黍の生育には向いていないらしい（少し痩せ気味の土地の方が黍作りには向くと時山さんが云う）。搾車処という砂糖絞り車の廻し役である亀嬢という女性は仕事が少なくなつたので「手や打ちまんこい」|| 手を打つて悦んでいるのである。

五節目からは、「大谷森」という亀津にある場所のことが登場して、こんもりとした山であり「森高き」と紹介される。そして次は、青年頭である禎起主と長栄主の二人の男性が歌われ、それに対する乙女頭として、まんぐわといんだぐわが紹介される。

さて、その二人の女性の器量比べが始まり、いんだぐわは出つ歯（歯浮上げて）だったらしく、まんぐわは「速い川水（流れが早い川のように水が澄んでいる）」、いんだぐわは「溜い水（淀んでいる水）」と形容することで、まんぐわが美人であると軍配を上げるのである。

一五節は青年頭として紹介された禎起主が祝いの席で、「かつら」を被つていたことが歌われる（そのことが面白くおかしく歌われているとすれば、いんだぐわの出つ歯であるとの相対かもしれない）。

そして最後の一六節から一七節にかけては「三方馬節」が挿入されるのが亀津の昔ならでの歌い方であったようだ。この歌の内容は単純で明快である。喜美輝主という男性のイチモツが馬のように巨きくて（道具三方馬道具）、相手にできる女性がいないという艶笑話である。一七節では、奄美大島の「金久」という場所（名瀬の金久か）に住むマツチヨウぐわという女性が「易しやくわ受けて」と易々と受け入れることが出来るのだと歌う。こうしてこの歌は、歌うシマンチュも聴くシマンチュも、おおらかな性を歌うことで、なごみながら終わるのである。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.79

めらんじゅ

2013年03月31日 通巻79号
月刊『Mélange』発行所
〒650-0012神戸市中央区北長狭通1-7-1
大橋愛由等
090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価500円（税込）